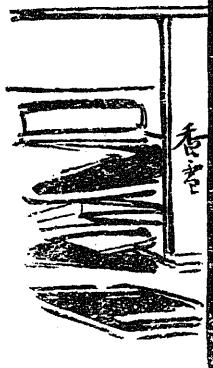




號七第卷一拾第



兒童の自我觀念

(フレーベル會總會に於ける講演速記)

文學博士 元 良 勇 次 郎

婦人学

今日は此のフレーベル會の總會に於いて、私が御話することの機會を得た事は、私の最も愉快に思ふ所であります。で先づ題としては、兒童の自我觀念としました即ち自分〜といふことの觀念は、どう云ふものであるか、又どう云ふ風に發達するものであるかと云ふやうな事を、話して見たいと思ふのであります。

斯う云ふ事柄は、餘程むづかしい複雑な事でありまして、一場の話で全部を盡すやうなことは到底出来ませぬ、實際の具體的の方面からは唯今河井先生より、御話がございましたやうなことでありませう。私の御話することは、幾らか又理屈の方面になるかも知れませぬ。けれども斯う云ふことは、色々の方面から見ることが宜しからうと思ふのであ

ります。

此の「自分」と云ふことの考は、我々何時の間にか知らない間に漸々得て居るのでありまして、既に氣の付いた時には、もう充分これが自分、これが他人とハッキリ區別が付いて居るのであります。其初め兒童の幼稚な時分には、兒童が自ら自分の心を觀察して、さうして其経験を話すといふやうな事は、到底出来ない事である。其氣の付いた時は既に遅い、故に研究が餘程むづかしいのであります。併ながら之には色々の方法もありまして、事情から推して、先づ斯う云ふものであらうと云ふやうなことを幾らか云ふことは出来るのであります。

一般の吾人の経験といふものは、此軀軀の外にあつて、或は風が吹くとか、雨が降るとか、水が出るとか、嵐が起るといふやうに、自分の軀軀以外の事柄を色々に経験する、其色々の事を経験する間には、其経験の相互間に何か聯絡があるだらう

と云ふやうな事を思ふ、例へば風が吹けば、其所等の木がザワ／＼云ふて居る。木がザワ／＼云ふて居るから風が吹くか、風が吹くから木がザワ／＼云ふのか、孰らだか分らないけれども、聯絡があるだらうといふ考は起るのであります、私の古郷の家の隣に大きな松の樹がありまして、何時でも風が吹くとエライ音をしてゴウ／＼鳴る。で子供心に、松があゝ云ふ音をするからして、其所から風が出て来るやうに思つて居つたことがあります。さう云ふやうな風に何かと経験して居る中に、彼此の間に聯絡があるだらうといふやうなことを思ふ、偶々間違つて居りまして、兎に角さう云ふ考を起すのであります。

それから又我々の、身體の中に、色々の経験がある。或は腹が減れば飢いと云ふ感じが起る、身體が疲れ切つた時に眠れば、非常に愉快になる等の如き色々の経験をします。即ち身體の外にあつては山川風雨の経験もあれば、身體の中にあつては

悲^{かな}し^しだ^り喜^{よろこ}んだ^り、氣^き分^{ぶん}が宜^よふ^たり悪^{わる}か^たり、色^{いろ}々^{いろ}の經^{けい}験^{げん}が有^ある^が、其^{その}色^{いろ}々^{いろ}の經^{けい}験^{げん}の聯^{れん}絡^{らく}を付^つける^には身^{しん}體^{たい}の中^{なか}に有^ある感^{かん}覺^{かく}及^あび感^{かん}情^{じやう}で聯^{れん}絡^{らく}を付^つけて行^いくといふ自^{ぜん}然^{ぜん}の傾^{けい}向^{かう}が有^ある。天^{てん}氣^きになつたら愉^ゆ快^{かい}、雨^{あめ}模^も樣^{やう}になつて來^くれば不^ふ愉^ゆ快^{かい}と云^いふやうな聯^{れん}絡^{らく}が付^ついて來^くる。色^{いろ}々^{いろ}聯^{れん}絡^{らく}の付^ついて行^いく中^{なか}に、自^じ分^{ぶん}の心^{こころ}の中^{うち}で、斯^かう云^いふことをしたいあ^あいふ事^{こと}をしたいと云^いふやうな、一^{いっ}種^{しゆ}の内^{ない}部^ぶの衝^{しょう}動^{どう}が起^おると、手^てが自^し然^{ぜん}に動^{うご}く、我^{われ}々^れ子^こ供^{ども}の中^{うち}か^ら馴^なれて居^ゐるから不^ふ思^し議^ぎに思^{おも}はないけれども、考^{かん}へて見^みると餘^よ程^{ほど}不^ふ思^し議^ぎなこ^ことが有^ある。幸^{さい}に健^{けん}全^{ぜん}に生^うま^れて居^ゐるものであるから、手^てを舉^あげやうと思^{おも}へば舉^あがる、下^さげやうと思^{おも}へば下^さがる。聲^{こゑ}を發^はしやうと思^{おも}へば發^はせらるるやうに出來^でて居^ゐて、それを當^{あた}り前^{まへ}のやうに思^{おも}つて居^ゐるけれども、段^{だん}々^{ぜん}研^{けん}究^{きゆう}して見^みるとナカ[〜]不^ふ思^し議^ぎな事^{こと}で、學^{がく}者^{しゃ}と雖^いども、古^こ來^{らい}此^{この}間^{あひだ}の聯^{れん}絡^{らく}を研^{けん}究^{きゆう}するに^は餘^よ程^{ほど}困^{こん}難^{なん}して居^ゐるのである。

子^こ供^{ども}の時^{とき}の事^{こと}を一切^{さい}自^じ分^{ぶん}で、之^{これ}を觀^{くわん}察^{さつ}するこ^ことは出來^でない、觀^{くわん}察^{さつ}するこ^ことが出來^でるやうになつた時^じ分^{ぶん}には子^こ供^{ども}の性^{せい}質^{しつ}は無^なくなつて居^ゐるといふ、困^{こん}難^{なん}があるけれども、爰^{こゝ}に一^{いっ}つ面^{めん}白^{はく}い話^わがある。それはどう云^いう事^{こと}であるかといふと、十^{じゅう}年^{ねん}程^{ほど}前に亞^あ米^{めい}利^り加^かに、ハナといふ或^{ある}る說^{せつ}教^{きやう}者^{じや}が有^ありまして、其^{その}人^{ひと}が、或^{ある}日^ひ遠^{えん}方^{ほう}に說^{せつ}教^{きやう}に行^いつて、それから馬^ば車^{しや}に乗^のつて歸^{かへ}る途^{とちゆう}中^{ちゆう}、能^よく亞^あ米^{めい}利^り加^かなんかに有^ある事^{こと}で、路^ろ傍^{ぼう}に赤^{あか}く塗^ぬつた大^{おほ}きな器^き械^{かい}が置^おいてあつた、所^{ところ}が馬^{うま}がそれを見^みて驚^{おど}ろいて荒^{あは}れたので有^あります。それが爲^{ため}に、ハナといふ人^{ひと}は、馬^ば車^{しや}から抛^{ほう}り出^だされて大^{おほ}怪^け我^がをして、人^{ひと}事^じ不^ふ省^{せい}になつたので有^あります。それから近^{きん}邊^{べん}の人^{ひと}々^々は驚^{おど}ろいて、これを介^{かい}抱^{ほう}した所^{ところ}が、氣^きの付^つく丈^{だけ}は付^ついた。眼^めを明^あけてさうして息^{いき}をするやうにはなつて來^きた。それで命^{いのち}は取^とり戻^もした譯^{わけ}で有^ありますが、スツカリ記^き憶^{おく}を失^うつて仕^し舞^まつた。以^い前^{ぜん}の事^{こと}の記^き憶^{おく}といふものがスツカリ無^なくなつて仕^し舞^まつたのですから、赤^{あか}坊^{ぼう}と同^{おな}じこ^ことに

なつたのであります。けれども矢張り眞の嬰兒とは何所か違ふ所があつて其時経験した事を記憶した後日言ふことが出来たのである。

兎に角以前のことはスツカリ忘れて仕舞つた。それだから、其所に人が来て据つて居るのも其の譯が一向分らない、唯だ其所に据つて居るといふことのみは見て知覺するけれども、何が何であるか言葉は無論、部屋は何所であるかわからない、總て智識といふものはスツカリ無くなつて仕舞つたのである。それから病院に連れて行かれて、寢臺の上へ寢かされて居る所が、或る時偶々自分が手を動かさうとした所が、手が動いたといふので、それを非常に不思議に感じて、それで段々手を向ふにやれば何んぼうでも動いて行く、ズツト寢床から起き上つて、向ふの方に手をやらうとした。此は後に話して分つたのでありますけれども、其當時は何故に起き上るか人が知らないから身體を動かしてはいけないといふので皆が寄つて其人を

寢臺に押し付けたと云ふのであります。其人は二十四五の男子であるから、ナカ／＼力が強い、一人や二人の看護人では押付ける譯に行かない、多くの人が皆な寄つて漸く、それを寢臺の上に押付けた。さうして括り付けて仕舞つた、病人は又、何故さう云う事をされるか分らない、両方ながら譯が分らない、それでも括り付けられたから仕方なしに沈つとして居た。翌日、自分の親戚の者が来て、親切に言ふて之を解いて呉れたので、非常に嬉れしかつた、と言ふて居る。それから尙ほ、色々の経験が書いてありますが、其中に、言葉を少しも覺へて居ないから、日々少しづつ、言葉を教へて貰つた。自分はズツト寢轉んで居るのに他の人が立つて歩くのが不思議であつた。又自分の部屋の戸を開けて、色々の人が入り代り立ち代り這入つて来る、戸の外に澤山の人が集つて居るやうな感じが起つた。男と女が違ふ着物を着て居るのををかしく感じた。それで或日看護婦に「あれは何

んだ、立つて歩くといふのはをかしい」と云つたら「今にあなたも癒くなつたら、あゝいふ風に立つて歩く事が出来る」と云つて知らして呉れた。其時には一向何の事だか分らなかつた。其外にも色々ありますけれども、さう云ふ風にして段々總ての事を新に覺へて行つたのであります。ところが或日妙な心持になつて來たから眠て暫くの後起きた所が、今度は傷をしてから其時までに経験した事をスツカリ忘れて仕舞つて。傷をする前の事が、其記憶にフト浮んで來た。何故自分は病院に居るのであらう、自分は説教に行つて歸り途に、馬が荒ばれたといふ事までは覺へて居る。それから後のことは何にも覺へぬ。さう云ふ風で暫時の後復入院後の人格になつた。人格の交互變換で數週間を費し終ひには、兩方の記憶が一致しやうとするけれども、どうも何んだか、函の蓋が丁度合はぬやうな風で、一致しやうとするけれども一致しない、此等を一致せしめやうとすると非

常に苦しかつたといふで居ります。六七週間の後には終に兩方の記憶が巧く一致して其所でマア傷をした前の人でもなければ、又傷をした後の人でもない、二つ合はしたやうな人が出來たと云ふ話であります。

此一事を以て考へても、吾人は全然知らない間に経験して居るから、不思議に思はないのでありますけれども、子供の時分の経験といふものは、お互の今日の経験に較べると餘程妙なものである。どう云ふ風に妙であるかと云ふと、活動の聯絡が不完全である。それから一つは變り易いといふことである、で今日は特別に此二つの點に就て話をして見やうと思ふ。

我々の自我と云ふものは一體何であるか、其方から少し考へて見なければならぬが、これは心理學に於ても餘程むつかしい問題でありまして、これに就ては、古來色々の研究がある。けれども、今日の心理學から見ると一口に云へば、所謂意思作

用といふものが自分と云ふことになつて居るのであります。其だけのお話をしても一向分らぬことでありませんが、昔は心といふものは、身體の中にあつて死ぬ時分には人魂が身體を中から抜け出て行くといふやうに考へて居つたけれども、それは色々説明の出来ない事がある。例へば人格の分裂といふことがある。身體の中に、一人の人格が居るのが普通であるのに、場合に依つては、一個の身體の中に二人或は三人の人格が出来る事がある。固より之は病氣でありますけれども、又珍らしくないことである。其人格の分裂は、分つて云ふと、同時に二つの人格があつて一つの人格は足を動かさうとする、一つの人格はそれを止めやうとする。一方では行かうとする、一方では止まらうとする、モチ／＼して居るやうなことがある。

或は又繼續的人格分裂といふのがある。前きの八つの場合の如きは繼續的人格分裂である、或時は

一方の人格のみであり、又或時は元に返つて居るといふやうに、詰り意思活動の作用が、巧く統一して居るのを一つの人格といふけれども、それが身體は同一人でありても、心の作用が二つに分れる時には、これを人格分裂と云ふ。其人格分裂といふものは、唯だ一つの物が他の方へ代るといふばかりでなく、甲なる人格と乙なる人格とは、氣質が、違ふといふやうな場合がある。例へば甲なる人は平生ならば人格が非常に正直で温なしくして確實な人である。その人格が變つて、乙なる人格になると、人を欺すやうな性質になる。又普通の時には、極く氣の沈んだ憂鬱な人で、第二人格になると快活になつてソワ／＼するといふやうな事がある。それは病氣の話であります。病氣でなくつても、幾らか之に類したやうなことがある。例へば最も明かなのは、夢の場合に、何か外の人が見られて、自分に色々話をする事がある。さういふやうな場合に、自分に話をする人が、他から

來る譯ではない、矢張り此は自分の心の中の一部分である。或は神様が現はれた。或は惡魔が現はれたといふても、夢に見る神様、惡魔は、矢張り自分の心の作用である。此等の事は如何にも不思議な事です。何故ならば、夢に見るものは、皆な自分の心の中から來るので、心以外のものを見る譯はない、自分の心の中にあるのは、それが矢張り第一人格の知らないやうな事を、話してそれによつて、初めて自分が知るといふやうなのは不思議な事であるが此は實に人格分裂の傾向を現はして居る。

兒童は、人格分裂といふ方から云ふと言葉が少し當らないが……分裂と云はずと移動といふのが宜しからうと思ふ。心が未だ完全に統一されて居ないものである。完全に統一されて居ないから、兒童の自我觀念といふものは、我々の自我觀念のやうに定まつて居ない、兒童は自分が、牛になつたり馬になつたりして、さうして聲色などを使ふ。

又は他所から客が來る場合ならば、自分が一人て亭主役になつたり、今度は又御客様になりて、挨拶をする、と云ふやうな事をしてそれを愉快に思ふ。我々から見ると、何故愉快であるだらうかと思ふ位であるが、兒童の自我觀念と云ふものは、まだ充分統一せられて居ない者ですから、何處へでも自分を當て嵌めて、御客様にもなれば主人にもなり、牛になつたり馬になつたり、又は人を馬にして乗るといふやうな、色々の事をして其場合々に愉快を感じるのは、自分が一時スツカリそれになつたやうな心持になるからであります。それ等のことは、幾らか私共も多少記憶があるが、子供は唯ださう云ふ風に、人格の聯絡が不完全であるといふのみならず、性質、氣分までが變る。氣分の良い時は、非常に愉快がつて居るが、チヨツト何か少し厭やな事があると、直ぐ氣分を悪くする。氣分の良い時の子供と、悪い時の子供とは、まるで違ふ人のやうに見へる。誰れでも多少の變

化はあるけれども、子供は著しくそれがある。

其故に子供のする事は、主義一貫といふ風に、始めから終りまで聯絡が付くと云ふ譯には行かぬ、寧ろ付かないのが多い、其場合、其場合の氣分に依りて活動して居るから、一時間前のことを、まるで聯絡のないことをして居るやうのこともあるのみならず前に良い子供であつたが、後に悪い子供になるといふやうなこともある。大人にでも多少其れに類したことがあるが、子供には特にそれが劇げしい、けれどもそれは大人程害にならぬ。其様に聯絡が不完全であるといふ所を以て、從つて兒童の自我觀念といふものは余程不完全である。

それが、どう云ふ風に發達して行くかと云ふと、先程話した様に意思活動に依るので物を遣り放しにするといふことは、意思活動の方面からいふと最もいけないのであります。此は思想の組織が、最も不完全であるといふことを現はして居るので

あります。

八

意思活動といふことは、遣り放しの反對で、自分で實行したことが、自分の氣に適ふか適はないかを見定めるのが夫れが意思活動の重要な部分であります、それが完全なる意思活動である。併ながら、それは初めからさう完全に活動といふ譯には行かない、初めは矢張り遣り放しで、結果が良いか悪いかはかまはない、或は時に物を置いてそれが翌朝見當らない、すると夕べ仕舞う時に何處に置いたやうと捜し廻はる、幾度もさういふ事がある、今度は一定の所へ何時も仕舞つて置かなければいかぬといふことに氣が付いて来る。即ち先きのことを豫想して事をするやうになる。其所で意思活動といふものが起つて来る。尤もそればかりに放任して、置いては、意思の發達が余程遅れますから、親の教育といふものがあつて、色々注意するといふ事になる。併そこらは加減もので自分で氣の付くまで棄て、置くのは極端である

が、又余り親が干渉し過ると、自分で觀察して自分で悟るといふことが無くなつて、始終人に依頼するやうになる。先程話しましたやうに、子供は矢張り自分に依りて行くといふ習慣を付けなければならぬからして、自分で不都合だと感ぜしめるのが良い、例へば子供が朝寝過すのを余りやかましく云はぬで一二度遅刻させたら宜からう、それで自分に不都合を感ぜしめたが宜からうと思ふと、それで後には、自分でも朝遅くなつてはいかぬと思ふやうになる。さう云ふ様な譯けで、余り外から言ふのも、依頼心を起すし、余り棄て、置くのも、教育と云ふことを無視する事になるから、其所は手加減です、丁度幼児が歩み初めた時分に手を離しても、遠方から保護して居るやうな風に全く放任して仕舞へば危ない、からして、手を遠い所から廻はして監督する。朝寝過せば學校に遅れるといふことを自分に感ぜさせるやうにして行つたならば、其所で先見といふ事が出来るやうになるので、斯うすれば斯うなる。失敗を重ねる度に其不都合を感じて来る、幾ら親が外から教育し

て、教へたりしても、自分が實驗したことには及ばない、自分で實驗して、それが次第に發達して来るのが自我の發達であります。さうして段々發達して来る中に、一方には統一といふものが漸々確實になつて来る。或時は非常に悲み或時は非常に喜ぶが、それが段々に變化が少なくなつて来る。何某といふものは斯う云ふ性質である。あの人は遅いけれども能く考へる性質だとか、あの人は確實な人だとか、あの人は敏捷な人間だとか、其人の特徴といふものが段々明かになつて来る。そうして其發達といふものは、兒童から青年になる頃に、最も劇げしき變化が起るのであります、併ながら又それから後にも矢張り年を重ねるに従つて經驗を積み、段々世間といふものに通じて来る。斯うすれば斯うなるといふことが豫じめ分るやうになる。當つて碎けるのではない。子供の中は當つて碎けるのであるけれども、年が行つて来ると當つて碎けては困る。實驗が段々に積んで来れば當らない前に用意する様になる。さう云ふ風に發達するのであります。